

Title	ラーニング・コモンズ : そこでは何をするのか何がやれるのか
Author(s)	上原, 恵美; 赤井, 規晃; 堀, 一成
Citation	図書館界. 2011, 63(3), p. 254-259
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2944
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ラーニング・コモンズ： そこで何をするのか，何がやれるのか

上原恵美，赤井規晃，堀 一成

What can we do for our students in the Learning Commons?, by UEHARA Emi, AKAI Noriaki, Hori Kazunari

1. はじめに

大阪大学(以下，本学)では平成21年4月と6月，附属図書館(以下，当館)の理工学図書館と総合図書館にラーニング・コモンズ(以下，LC)を開設した。当時，「学位の質保証」について指摘した中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(平成20年12月)が発表された直後であり，それに呼応するように大学図書館界でも「ラーニング・コモンズ」というキーワードが盛んに飛び交っていた。そのため，先行して開設していいたいくつかの大学と同様，当館にも多くの大学図書館からの見学者が相次いだ。

それから丸2年が経過し，「ラーニング・コモンズ」は，わが国の大学図書館界でも研究テーマとして学際的な様相を呈するほどに広がってきている。このたびは，当館がこれまでに取り組んできたLCに関する活動について，本誌で紹介させていただく機会を頂戴した。これから述べるささやかな実践(挑戦)が，学習支援サービスの開発に向けて本腰を入れようとしている大学図書館職員にとって，あるいは教育改革に取り組む大学教員にとって，いささかでも参考となる実践例となれば幸いである。

本稿では，最初に本学教員である堀が，総合図書館LCで行った全学共通教育科目『基礎セミナー「図書館パスファインダーをつくろう」』の実践について，次に当館職員である赤井が，堀と協働して総合図書館LCで行ったライティング・サポートの実践について，最後に同じく当館職員の上原が，理

工学図書館のLCをめぐり学生であるTA(Teaching Assistant，本学では大学院生)や教員と交流した中で経験した，学習支援の「仕掛け」としてのLCの可能性について，述べていくことにする。

2. 学生とつくる図書館パスファインダー：教員による単位科目の実施

2.1. 科目の概要紹介

まず，この単位科目が位置づけられている基礎セミナーについて，簡単に紹介する。

本学では，全学部の1年生および多くの学部2年生に対して，豊中キャンパスでの全学共通教育を行っている。基礎セミナーは，特に初年次学生を対象として提供する少人数セミナー型全学共通教育科目である。対話形式・体験的課題追求型のセミナーを行うことで，早くから大学における学習の姿勢や研究についての意識を高めてもらうことを目的としている。各教員が専門としている研究内容を易しく紹介するような内容が多いが，多文化コミュニケーションやキャリアデザインなど分野横断的な内容も提供されている。

2.2. 科目設定の経緯

ここで，基礎セミナーの一科目として「図書館パスファインダーをつくろう」を提供することにした理由について，簡単に触れる。近年，大学での学びのあり方が，(学生へ何事かを教員が教えることを主体とみる)「ティーチング」重視から，(学生が何事かを学びとることを主体と見て，教員はサポート役と考える)「ラーニング」重視のものへ変更されつつある。基礎セミナーの基本精神としてもそのようなものが求められると判断し，担当するにあたって受講者の将来の学びの姿勢獲得につながるような，

うえはら えみ 大阪大学附属図書館
あかい のりあき 大阪大学附属図書館
ほり かずなり 大阪大学大学教育実践センター

情報発信作業を主内容となるよう内容を考えた。図書館の LC がどのように教育の場として利用できるのかを試してみたい気持ちも持ち合わせていたので、図書館に関係のあるデータとしてパスファインダーを作成するものとしてみることにした。図書館パスファインダーは、図書館職員や教員が作成し提供することがほとんどの場合であるようだが、そこに学生自身が学びの成果を同レベルの学習者に提供するという、新しい視点を盛り込めば、面白い試みにもなるのではないかと考えた。

2.3. 授業の実際

この「図書館パスファインダーをつくろう」には、平成22年度は2名、23年度は1名の学部1年生が受講した(23年度は本稿執筆時点で進行中)。ここでは、どのような内容で進行したかの紹介と、完成したパスファインダーのインターネット上での提供状況を説明する。

セミナーの回数は全15回で、一回当たり90分である。その内容は、

- ・最初の回のオリエンテーション
- ・図書館パスファインダーとは何かの説明と、代表的な例の確認
- ・各自のテーマ探し、データ作り
- ・HTML の基本の説明と、データを HTML に成形する作業
- ・完成データの PDF 化作業と最終確認および全体の総括

であった。

平成22年度の受講者が作成したパスファインダーは「ゴーゴリについて調べてみよう」(図1)、「歌舞伎について調べてみよう」という内容である。同級生に興味を持って

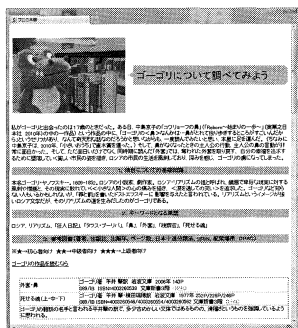


図1 作成したパスファインダー画面の例

もらえるような情報発信をするというコンセプトなので、単純な書誌紹介の内容だけでなく、どうしてその内容に興味を持つようになったか、かなりパーソナルな思いや趣味に踏み込んで紹介文を書いている。

完成したパスファインダー(HTMLデータとPDFデータ)は、本学大学教育実践センターが運営する学生の学習を支援する情報提供サイト Study-Aid (<http://www.study-aid.net/>)



図2 学習支援サイト Study-Aid 画面例

で「ワニの本棚」と名づけ公開している(図2)。

2.4. 高大連携教育の試み(高校生を対象に)

本学は、高大連携教育の一環として、基礎セミナー科目を近隣の高校生が受講する試みを進めている。特に参加者が討論をし、学習成果を発表しあうセミナー形式の科目は、高校生にとって学ぶ手法の多様性に気づいてもらえる良い機会と言える。オープンキャンパスとは異なる本格的な大学体験をすることで、将来の進路選択の参考にしてもらおうとの意図もある。

現在進行中の23年度第1期には、2名の高校生(学年は両名とも2年生)が参加している。大学図書館利用経験がなく、作業や資料調査に充てられる時間も少ない者と、どう折り合いをつけて進行していくかが課題である。

例えば、履修期間中だけのPC設備利用IDの発行や図書館利用者証の交付を特例として認めてもらった。またHTML作成にWindowsメモ帳ソフトを使うなど、大学以外の環境でも作業ができるよう説明を工夫するようにしている。実施にあたり、ご協力いただいた附属図書館と大学教育実践センター教務係の担当職員の方々に、感謝する。

これに関する具体的な内容は、現在作業進行中であるためここでは紹介しないが、今期の終了時点で完成データを前記 Study-Aid サイトに掲載する予定であるので、興味を持たれた方はご覧になっていたきたい。

2.5. 今後の展望

ここでは学生がパスファインダーを作るという授業の事例を紹介したが、このように学生自身が情報発信する体験を増やすことが、自発的学習のきっかけになると考える。またそのような体験は教室での正課授業だけでなく、いわゆる授業外学習のテーマ

として特にふさわしいものであると考えている。そして、そのような学習の場として図書館の果たす役割は特に大きいものと考えられる。本学には LC という格好の場が整備されており、利用することができたが、それに限らず「図書館」という空間や機能は、大学教員にとって様々な教育活用が可能であろうと思う。今後も、多様な図書館活用法の提案と実践をしていきたいと考えている。

3. ライティング・サポートの試み：単位外の学習支援

3.1. 概要

LC の活用と情報リテラシー教育プログラムの充実を兼ねた新たな取り組みとして、平成22年度に総合図書館で二つのライティング・サポート企画を実施した。一つ目が学部1-2年生を対象に6月に開催した「レポートの書き方講座」(全3回)、二つ目が学部3-4年生以上を対象に12月に開催した「論文の書き方・文献の読み方 プチ・ゼミナール」(全4回)である。なお、前者については23年度も同時期に開催した。

同様の企画については多くの大学図書館で先行事例があるが、本学の場合、「学びの場、発想の場、表現の場」という LC のコンセプトを活かしたワークショップ&ゼミナール形式を採用した点、および、教員と図書館職員の協働実践として行った点においてユニークな試みであるといえよう。

いずれの企画も、教員である堀と図書館職員である赤井との協働作業である。全体概要については、堀による報告¹⁾がすでにあるのでそちらに譲り、ここでは両企画のコンセプトを中心に述べその報告への補足としたい。

3.2. 企画のコンセプト

3.2.1. ライティング・サポートと LC

ここ十年来、各大学では初年次教育やリメディアル教育の充実が図られてきた。一口にいえば、高校と大学の学び方にあるギャップを埋め、学生を大学での学びに円滑に誘導するための仕掛けである。なかでも、「学び方を学ぶ」スタディ・スキルズ教育が重要な位置を占め、特に、日本語表現法教育やアカデミック・ライティング指導による言語運用技能の教授に力が注がれている。また、卒業までに学生が習得すべき能力として中央教育審議会が定式化し

た「学士力」においても、言語運用技能(「読む、書く、話す、聞く」能力)が「汎用的技能」として基礎能力に位置付けられると共に、情報リテラシーも同じ「汎用的技能」として並列されている。このことから、スタディ・スキルズ教育と、大学図書館の教育機能とは、「学士力」の開発という点で接点を見出し得るといえる。

他方、大学図書館では探求型学習・課題解決型学習に慣れ親しんだ学生に対して魅力ある図書館環境を提供しようと、グループ・ワークやディスカッションなどができる LC を設置するのが昨今の流行である。しかし、情報リテラシー教育も含め、提供し得るサービスを不断に革新していかなければ、LC という「箱物」をもてあますだけで、大学図書館はネットカフェやサロンと化してしまう。そうした状況を打開するには、LC の可能性を引き出すアイデアが必要である。そこで、LC を使った新しいスタイルのライティング・サポートを実践してみようと思い立ったわけである。

3.2.2. 「レポートの書き方講座」

最初の企画は「レポートの書き方講座」である。事前に打ち合わせを重ねた結果、講義一辺倒ではなく、可能な限り実習を織り込んだ自己体験型の講座とすることにした。企画そのものが初めてということもあり、講師は堀が担当した。

テキストは受講後の自主学習を想定し、定番の指南書からエッセンスを抽出した内容のものを特別に用意した。要所で実習を交えつつ、時には実際に LC のそばにある参考図書コーナーを案内するなどして、図書館の有益さを印象づける工夫も凝らした。また、レポートは「感想文」や「入試小論文」と異なり、図書館が所蔵する一次資料・二次資料を活用して書き上げるものであることを、強く印象づけるよう心掛けた。

そうした講義以外の実習や最終回の模擬レポートの作成体験を通じて、受講者には、冊子・電子情報を自由に駆使すれば、「調べる」から「書く」にいたるまでのプロセスが、図書館という単一の空間の中で充足することをつかんでもらえたのではないかと考えている。

実際、最終回のアンケート結果では、参加者から一定の満足度が得られたことがわかった。毎回アンケートを行い、その結果を基に理解度にあった進行および説明を行うよう配慮したこともその一因であ

ろう。とはいえ、そもそもライティングについて前提知識が無い学生を対象としているのであるから、肯定的な結果が得られるのは当然ともいえる。

それよりも、企画した側としては講義や実習を通してどのような学習効果があるのか目に見えないことが気がかりであった。さらに、LCで実施することの意味付けがまだ不十分である点についても検討の余地があると感じられた。

3.2.3. コンセプトの見直し

そこで、LCは「学び方を学ぶ」場であるという観点に立ち、企画のコンセプトを一から見直すことにした。まず、学習行動を、「入手する(情報取得)」、「考える(言語理解)」、「表現する(言語表現)」という3段階でとらえ、それぞれに図書館利用者教育やスタディ・スキルズ教育のコンセプトをあてはめて論点整理を行った。

その結果、次の企画には、①実践性により重点を置くこと、②「言語理解」のサポートを強化すること、の2点を反映させることにした。即ち、①については、学生にとって動機を確保しやすい、ワークショップ+ゼミナール形式を採用することにし、②については、書き方を理解するためには視点の変化が効果的であると考え、リーディング・ストラテジー(国語教育の分野では「読みの方略」と訳される)を特に取り上げた。

リーディング・ストラテジーとは文献を構造的に読む技法で、アメリカの大学では英語を母語にしない留学生を対象にしたアカデミック・リーディングの授業で指導される一種の速読法である。論文を書くポイントを知るために、読みの技法を援用しようという趣旨である。

こうして練り直したコンセプトを元に、打ち合わせを重ねた結果生まれたのが、次の「論文の書き方・文献の読み方 プチ・ゼミナール」である。

3.2.4. 「論文の書き方・文献の読み方 プチ・ゼミナール」

この企画の主眼は、受講者があらかじめ作成した企画書を3回の講義を通じてブラッシュアップする道筋を知り、それを元に自ら実践することで論文の書き方を習得してもらおうというものである。添削指導は行わず、技法指導に特化したのは、その方が分野の異なる学生を均等に扱うことができる利点があると考えたからである。

具体的には、事前準備として論文企画書の作成、3

回の講義、最終発表という構成で進めていった。今回は図書館職員も講義を担当し、教員・職員協働の面を強調した。

また、講師がコーディネイター役として積極的に企画書に対してコメントしたり、受講者と可能な限り対話したりすることを心がけた。さらに、プレゼンテーションやピアレビューを通して、受講者同士が会話をする機会を設けることにも気を配った。結果、講師も含めた参加者相互のコミュニケーションの実践を重要視することにLCを活用する意義を見出すことができた。

最後まで受講した学生はわずか3名ではあったが、最終回に参加者が持参した企画書は、最初に提出されたものと比べて、問題点が絞り込まれ、構成も明快になっており、非常に洗練された形に生まれ変わっていた。このように、学習効果が目に見える形で確認できたことは当初の目的とも合致し、一定の成果があったといえる。

3.3. 「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」

二つの企画の実践を通して改めて実感したことは、LCという新しい「容れ物」にはそれに見合った、新しい人的サービスの発想が必要だということである。LCが図書館の教育機能を具現化する場であるならば、旧来の枠組みを踏襲しているだけでは新たな価値は創造しえない。既存の有形(資料)・無形(人員)のリソースをいかに活用するかを、大学が直面している教育面での課題という、より大きな文脈において論じ図書館の機能を演出し直してこそ、LCの価値も高まろう。ひいてはそれが、真の意味での「場としての図書館」を実現することにつながるかと考えている。

4. LCの活用法を提案する：LCの可能性

4.1. 理工学図書館のLC

本学のもう一つのLCは、理工学図書館にある。広さは総合図書館のその約1/3程度(表1)であるが、PCの数は総合図書館より多いなど、感覚的には手狭感はない。

LCがある建物は築40年の建物であり、耐震改修工事が必要とされていたことが、理工学図書館にLCが設置されることになった、大きなきっかけであった。

理工学図書館は吹田キャンパスに位置しており、

表1 LCの規模

	総合図書館	理工学図書館
面積	756m ²	236m ²
PC	18台	29台
貸出PC	24台	10台
座席数	94席	40席

主に工学研究科／工学部および情報科学研究科，またそれらに関連する研究所等をサービス対象とする図書館である。工学部の学生は初年次の大半を豊中キャンパスで過ごすので，学部生が理工学図書館を利用するようになるのは，初年次後半か2年次以降となる。

4.2. 特徴的な設備

理工学図書館のLCの場合，学内の他部局であるキャンパスデザインセンターに設計段階から協力を得られたことが，特長の一つにあげられる。ここに所属する教員は，建築のスペシャリストである。そのバックアップによりLC内の什器等の配置，露出している配管を「デザインに変える」ためのペンキの色やカーペットの配色にいたるまで，改修前の「暗い，古い」理工学図書館のイメージを完全に払拭する，スタイリッシュな空間に生まれ変わることが可能となった。

理工学図書館LCの2つめの特徴は，同じく改修した図書館ホール(100席)やギャラリーふの廊下，グループ学習室(3室，各室12名定員)までも含め，拡大的にLCとして位置づけているところである。図書館ホールで学内外の研究会や学会等などが行われることを想定して，廊下ではポスターセッションが可能なようにピクチャーレールが多く設置されている。また，グループ学習室はガラス張りの部屋であり，一歩外に出るとピクチャーレールのある廊下になっていて，図書館ホール，グループ学習室，廊下を行き来することにより，館内での多様なコミュニケーションを実現してもらおうという試みである。

4.3. 使い方，あれこれ

4.3.1. TAによるミニ講習会

理工学図書館のLCにも総合図書館と同じくTAが配置され，彼らによる小規模の講習会(ミニ講習会)が企画・実施されている。はじめのうちは図書館利用法の基礎的な講習会，つまりOPACの使い

方や文献データベースの紹介や簡単な使い方について，図書館員の支援のもとにTAの学生たち自身により資料作成，講習会実施が行われていた。

しかし，TA配置後2年目には図書館利用法以外に，TA一人ひとりの専攻分野や経験を盛り込んだ講習会も企画・実施されるようになってきた。例えば，海外での技術研修を目的としたインターシップを経験したTAは，「IAESTE 海外インターンシップ」と題して自分の経験を語り，またその他大学院での研究生生活を紹介した「工学系の博士の歩き方」という講習会もあり，そのいずれもがLCを好んで使用している学部生には好評の内容であり，講習が終了した後でTAに直接質問をする熱心な姿も見られた。もともと理工学図書館の主な利用者である工学部の学生が大学院への進学率が非常に高いこともあり，学部のうちから大学院や海外での技術インターンシップに対して関心が高いことと合致した内容であったと思われる。

図書館が主体的に運営するLCであるので，図書館に関係する講習会が行われることは当たり前であるとしても，上記の例に見るように，学部学生にとっては学生生活の先輩であるTAから，彼らの経験や大学院での研究生生活についての情報を得られる場としてのLCのあり方も，いわゆる「コモンズ」としての図書館の可能性を広げる実践として位置づけてもよいのではないかと考えている。

4.3.2. ポスター発表の実践の場として

理工学図書館では，先に書いたとおりギャラリーとしての廊下やグループ学習室もLCの一部に位置づけているが，それを学習の中に取り込んでもらう試みとして，工学研究科大学院科目である「工学英語Ⅱ」を担当する教員にご協力いただき，平成22年度後学期の授業でそれらを活用していただいた。

「工学英語Ⅱ」では，大学院生の国際会議等における英語によるコミュニケーション能力の基礎を養成する事を目的とする授業を実施している。その中の何回目かの授業では英語によるポスター作りやポスターセッションのトレーニングの予定がある，という情報を得たので，さっそく授業を主催する教員に連絡を取り，施設を実際に見ていただいたところ，図書館側の提案を快く受け入れてくださった。

具体的には，模擬の学会登録実習，プレゼンテーション実習をグループ学習室で済ませた後，ギャラリーで模擬ポスターセッションを行う，というスタ



図3 模擬ポスターセッション

イルで授業が進められることになった。模擬ポスターセッションでは臨場感のあるポスター発表ができ、教員・学生ともに好評で、今年度も同様の授業を実施する計画であると聞いている。このようなスタイルの授業が実施できることは、「実習などのアクティブな作業をともなう学習ができる」「ディスカッションができる」ことが身上である LC の活用方法のひとつである(図3)と思われる。

その時に掲示されたポスターは、担当教員、ポスターを作成した学生の許可を得て、その授業後しばらくそのまま掲示させていただいた。それらは、学部学生にとって、学習上何らかの刺激になるのではないかと期待しての配慮である。

4.4. 理工学図書館 LC の課題

先に書いたように、理工学図書館の LC は小規模であるが設置されている PC の数が総合図書館よりも多い。これは、見ていてさながら「ネットカフェ」のようにも見える。各利用者がそれぞれの画面に集中するせい、ディスカッションや共同作業など、協調型の学習や作業は発生しにくいことが観察されている。また、広さという点においても、テーブルや椅子同士の間隔が狭いと、かえって会話が発生しにくいこともわかってきた。

理工学図書館の LC は、先に書いたとおり建築の専門家の意見が反映された、デザイン的に優れた空間であるが、さらにそこに教育工学的知見も加わる必要があると思われる。つまり、教育学で言われているところの「アクティブ・ラーニング」を誘発するような仕掛けを組み込むことである。適度な PC の数、適度なパーソナル・スペースの確保など、スペースや財源の制約を同時に抱えることではあるが、今後検討すべき課題と考えている。LC をよく知る

ある教員が、「PC は最低限の台数があれば、どちらかという学習空間には「ない」方がよいのだ」と耳打ちしてくれたことが、とても印象深い。

5. さいごに

LC は、教育においては「ティーチング」から「ラーニング」へのパラダイムシフトを示す一つの応えであり、そのことを背景に大学図書館界では「場」を抱える大学図書館の復権を象徴するキーワードになっている。だからこそ、それを運営する図書館側の力量が、今後ますます試される。日本にありがちな「箱物行政」にならないために、LC の可能性を引き出すためのさまざまな企画が必要とされている。

本学においては、例えば図書館員が TA の活動をどのように企画、サポートしていくかはもちろんであるが、図書館員自身が LC でどのように振る舞い、活動するかが最重要課題と思われる。TA は、その設置目的である「教育者としてのトレーニングの機会」の実践活動を LC で行っているのであり、同時に図書館員をその専門的知識でサポートしてくれる存在でもあるが、図書館員が TA を監督し、活動させていけばよいということでは決してない。図書館員自らが TA と同様、LC での実践活動が必要なのである。当館では、授業の中で図書館ガイダンスを行うことは数年実施されてきたが、図書館員自身が日ごろから図書館内で講習会を実践することなど、細やかな学習支援を企画・実施する機会に乏しかった。それゆえに、図書館員自身が学習支援に関わるためのノウハウの蓄積がない中での LC 運営であるが、TA の知識や意欲の後押しも得ながら、学習支援の一翼を担う図書館員としての「体力」作りを重ねていきたいと考えている。

また、LCに限らず、学習支援の一部としての図書館利用教育の拡大・充実の試みは本学だけ、また図書館員だけの努力で進められるものではない。他大学や地域図書館とも連携を進め、教員と図書館員がともに知恵を寄せ合って、大学や図書館界全体にそのことが広がっていくよう努力していきたい。

注

- 1) 堀一成「附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み」『大阪大学大学教育実践センター紀要』7, 2010, p.81-84.